

Rorschach method の構造上の性質と inkblot 反応の 心理的距離に関する一考察

熱 田 一 信*

A Study of Structural Characteristics of Rorschach Method in relation to Psychological Distances of Inkblot Responses

Kazunobu ATSUTA*

Abstract

This study considered the Rorschach method with a view to analysing psychological distance, with reference to the following three points;

1. Utilizing the Rorschach method,
2. Rorschach situation in relation to inkblot responses,
3. Structure of Rorschach method in relation to inkblot responses.

This is illustrated by data obtained by applying Rorschach protocols to analyse psychological distance in a schizophrenic patient.

Key words: Rorschach method. structural characteristics. psychological distance. Rorschach situations. blind analysis.

キーワード：ロールシャッハ法、構造的特性、心理的距離、ロールシャッハ状況、ブラインドアナリシス

はじめに

かの Rorschach. H (1921) が Rorschach method を公刊して今年で約80年近くになろうとしている。本邦でも、内田 (1930) ・岡田 (1930) がそれぞれ教育心理学・精神医学の領域でこの技法を紹介してから、早くも70年近くを経過する。筆者は精神疾患（主として精神分裂病）に罹患している患者の外界知覚と精神内界との関係への興味からこの技法に出会い、修正 Klopfer 法（片口：1956）の草分け的存在であった片口安史氏（1927-1995）からこの技法の手ほどきを受け現在に至っている。

臨床心理活動は心理査定・心理療法・臨床心理学的援助活動の3つの領域から構成され、心理査定は後2者を支える重要な柱である。しかしながら、従来の Rorschach method の主たる役割は精神医学的診断の補助としての役割が主流であったため、心理学的治療法や臨床心理学的援助方法の選択に対する貢献度は決して十分とはいいきれなかった様に思う。

ところで、治療や援助を必要とする対象と治療者との心理学的関係に関するテーマは我々がカウンセリングや精神療法という広義の臨床心理学的援助を行う場合常に避けられない課題であることは周知のことである。そこでここではまず手始めにとりあえず現在までの

* 九州看護福祉大学看護学科 Dept. of Nursing, Kyushu University of Nursing and Social Welfare

Rorschach Method に関する幾多の理論や理念をとにかくカッコに括り、被検者サイドから見た場合のこの技法の構造上の性質を問直し、併せてこの技法に作用する心理的距離の考え方に若干の考察を試みたい。

1. Rorschach method の位置

どのような心理テストでも共通する技法上の特徴は、①一定の条件下で一定の刺激が一定の教示の下に被検者（以下 VP と略称す）に提示され、②何がしかの枠組みによって VP は反応させられ、③その反応は一定の理論と方法によって取りまとめられるという 3 つの主要な部分に分解される。そこで Rorschach method の場合はどうかというと、① Rorschach, H (1921) の開発した刺激図版 (inkblot の一種で 10 枚の構成) が特定の教示と刺激呈示の方法の下に VP に呈示され、② a. VP は個々の刺激図版に知覚する内容を言語反応という形式で反応させられ (自由反応段階という・以下 PP と略称す)、b. 全刺激図版に対して一連の反応が終了すると、その個々の反応に立ち返って検査者の導入によって反応の吟味・検討・確認が行われ (質疑段階という・以下 INQ と略称す)、③その結果は一定の記号化という言語体系、即ち Beck, S. J (1984) のいう Rorschach language に翻訳され取りまとめられる。このように、心理テストによる査定の場合、どの技法も①特定刺激の呈示→②反応を得る (VP はさせられるという体験)→③一定の枠組みによる数量化や翻訳作業という一連の 3 つの共通した作業工程から構成されている。

それでは、Rorschach method は心理テストの中でどのような技法と考えられてきたのだろうか？この技法は古くから、①人格の鑑別診断検査として質問紙法と対比されて来たこと、②特に、提示される刺激そのものが構造的に曖昧な inkblot であり VP の反応に極めて多様性があること、③この技法の開発者であった Rorschach, H 自身が当時精神分析学会会員であってしかもこのテスト公開後一年にして他界したという 3 つの点に加え、当時の心理学を取り巻く時代背景の影響もあって、この技法を一義的に projective technique と位置づけて来たと考えられる。しかし、Exner, J (1991) は①心理テストをそもそも客観テストと投影テストに 2 分類した不幸な歴史の存在、②厳密に投影理論に基づいた投影法の存在が極めて少ないという現実を指摘し、Rorschach method は特定の理論に基づいて造られたものではないとした。また Frank, L. K

(1938) によれば少なくとも部分的に未構成で不明確な刺激状況を持つテストの場合、例えばその結果に正答が存在するものであっても、考え方によっては全てが projective method になると述べている。確かにこのような考え方は臨床的にはいくらかでも確認する事が出来る。Exner, J (1991) は本法の歴史的検討の結果「ロールシャッハ・テストは投影法として考案されたものではなく、また、使用されはじめてから 20 年間は、投影法として発展したのではない… (中略) …このようにしてこのテストもまた、客観テスト対投影テストという 2 分主義において、投影テストの中にはっきりと名前をあげられるようになった。」(pp20) と述べる等これまでの様々な研究を総括してこの技法を独自のシステムに位置づけた。この様な事情からも Rorschach method は数あるテスト法の中で個々の研究者の projection が最も影響し一人歩きしたテストではないかと筆者は考える。

ところで、Rapaport, D (1946) は投影法の一般的特徴として、①他の人格テストと同様、診断 (広義) のために使用する事、②個々の人格に特有の行動を誘発するものである事、③その場合、解釈の手掛かりとして使用するのにふさわしい行動サンプル (テスト反応、筆跡のサンプル、その他の表現運動等) を引き出す場合 VP の行動の仕方を限定しない事、④通例、反応には正誤の区別がなく、時と場合によって多様な情報を含んでいると定義した。しかしながら、各個人の特徴的な行動を projection と見なして、単にかなり自由な行動サンプルを引き出せる方法だという理由のみで projective method と定義するのは、結局は projection というメカニズムの持つ特有な意味を消失させるものでしかない。その意味では、Piotrowski, Z. A. (1957) や片口 (1970) が問題提起したこのテストの理論に縛られない側面に改めて注目する必要があるし、そこに本法の原点があると筆者 (1986) は考えている。

2. とりあえずの判断としての Rorschach situation

やや冷ややかな表現かもしれないが、本来 VP にとって Rorschach の反応誘発刺激への正解はインクのシミでしかない。つまり、VP がその inkblot にいくら多様な反応を与えたとしても客観的という意味での課題解決 (真の課題解決としての正解) はどこを探しても見あたらない。とすると、テスト場面という対人的圧力場面で Rorschach 刺激を目前に与えられた VP は彼の記憶や経験から何か知覚的に類似のものを呼び覚まし「とりあ

えずの判断」として言語反応するしかない。(ここで「とりあえずの判断」と表現したのは、この場面での反応内容と場面構造の双方共 VP にとっては白黒のつかない状況に他ならないからである。)従って、筆者の臨床上の経験では PP を終了した段階で大半の VP は「やれやれ終わった!」というようなホッとした表情を大なり小なりするものである。だがその後には今度は一つ一つの反応に立ち返って「刺激図版のどこに見えたのか?何故みえたのか?何をみたのか?」に関して検者と対話しなければならない。しかもこの INQ 場面の到来は VP には前もって何も知らされていないばかりか、PP 段階において「自由に何に見えてもいいんですよ」とだけ励まされているのである。つまり INQ 場面になると、VP は検者のやんわりとはあるが「まだテストは終わってませんよ!」という構えの中にある意味では強引に飲み込まれる事になる。この様な飲み込まれる場面を(あるいは放り込まれる)VP の立場に立ってみれば「そんなこと言われたって!」とか「それならそうと、最初から言っておいてくれればよかったのに!」という気持ちかも知れない。しかし、殆どの VP はそのような呟きもなく、自らが与えた個々の「とりあえずの判断」反応の知覚的拠り所に関し検者とのやり取りをスムーズに展開する。こうした状況を Schachtel, H (1975) は Rorschach situation と名づけた。言換えれば、この場面の特徴は検者が VP の反応を巡って「私に分かるように教えて!説明して!」と執拗にねだる場面とでもいえるだろう。しかしこのねだる過程が通常円滑に進行することについて Schachtel, H (1975) は「臨床的に正常な群の大部分は…、丁度パズルやそれに類する課題に立ち向かう時のような構えでテストに取り組む」(pp. 110)と表現し、また、馬場(1977)も「テスト場面の中では検査者のある程度統制された退行という一時的な内的な動き」(pp. 78)によるとしている。つまり、INQ 段階は VP の眼前にある如何ともし難い inkblot を巡って VP の「とりあえずの判断」と検者の適当な退行を核とした検者-VP の二項関係のように一見みえるけれども、その本質は検者-反応誘発刺激-VP の三項関係の中で展開する一種の構造化された面接技法である。そしてこの技法をこのように我々が理解している事が距離分析の展開のために重要である。

3. Rorschach method の持つ構造的ズレ

周知の如く VP に一定の順序で提示される10枚の

Rorschach 刺激図版は一つとして同じものはない。それを、一枚づつ手渡されて、「何に見えるか」と問われる状況は「あなたはこの多様な inkblot をモデルとした環境の中から何を取り出し、どう処理しますか?」或いは「正しい答えのない多様な状況をどう見て、生きていきますか?」という人の注意や知覚の集中性と転導性・選択性を利用した一連の環境処理実験である。そしてその状況は10枚の反応誘発刺激の構成が完全ではないが、未分化しながら、大方対称的といえる単色・多色・開合・閉合の複雑な構造の図柄だからこそ VP の環境処理の在り方の特徴が反映される訳である。つまり VP の環境処理の様相を捉え説明するこの技法のシステムは大きく分けて①「図として選択した」領域 (area) ②「図として選択した」領域の内容 (content) ③「図として選択した」内容がそこに存在する理由 (determinant) ④「図として選択した」内容の VP の広義(例えば地域、時代)・狭義(例えば疾患単位)文化内の位置 (P 反応・O 反応) ⑤「図として選択した」領域と内容とその存在理由に対する説明過程を基礎とした現実認識度 (form level の評定) の5つの部分から構成されている。そしてこの場合①の「図として選択する」行為及び②の「図として選択した」領域の内容の選択という2つの作業は検者のいる対人的圧力場面の中では無意識的作業である。言換えれば、精神人類学研究として開発した藤岡(1957)の L-C combination の成立は VP の中での無意識的・自動的に行われる作用であるからに他ならない。つまり殆どの VP は Rorschach method が自分の想像力を試すものだとして理解し、検者である我々は実験室的に構成された環境処理(仮想生活状況と表現する)の様相をこの課題解決場面(疑似課題解決と表現する)を通して見ているというズレが生じ、この両者のズレがこの技法の重要なポイントであって、そこに距離分析の可能性が内包されている。

ところで Rorschach method に距離という概念を持ち込んだ最初の研究者は Rapaport, D (1946) である。彼は inkblot の認知とその理由付けに際して、一般の標準から逸脱し、検査事態の現実に対応しない反応様式があることに対して、deviant verbalization と命名した。片口(1956)は Rapaport, D (1946) のこの analysis of verbalization について体験的距離が働いていることを提案すると同時に、プロット-反応間の距離として認知的距離の概念が関連することを見出した。

4. 心理的距離に関する Blind Analysis

X年Y月精神分裂病に罹患していると思われる尊属殺人女性（24歳・高校卒業・精神分裂病の疑い）の心理学的診断を依頼され、拘置所に拘留中の被疑者（VP）に対して Rorschach Method を中心に数種類のテスト・バッテリーを施行した。その結果は Rorschach 以外の検査結果でも分裂病反応に拘禁反応が加わり距離の問題を大きくはらんだものであった。そこでここでは Rorschach protocol の一部を手がかりとして Rorschach method における距離の考え方について若干の考察を試みる。尚、ここで使用した Rorschach language は修正 klopfer 法－旧法（片口 1977）による。

I カード

PP：6秒へこれはどう見ても狐なんです 狐なんですけど 魔女が二つ重なっているような…真ん中に首のない体が立っているような…それだけです …とにかく魔女が二つ重なって首のない体を引きちぎっているように見えます

INQ：（狐）狐は耳ホッペ目…耳の部分がピュンとしている 飼猫に似ていてかわいいと思って（魔女）何か暗い色で…黒い…マント…黒くて（首のない体）スカートに見えて 足も見える 腰のラインが盛り上がっている…スカート…手をこう上げて（動作）こう立っている（椅子から突然立ちあがる）（引き千切る）この手が上がっていて魔女が二つ重なって引き千切る（反応の区別）何だか分からない 重なって私の良く通じない（3つのことを言ったのだから…？）重なって何だか…

①WS Wo M - C'F mF Ad (Hd) (H) Eye Cg

距離分析：この刺激に対する反応は「狐」「魔女」「首のない体」の3つだが、PP段階のはじめの部分またINQでの検者の介入によって一応の弁別はついている。しかしながら、Shakow, D (1962) のいう主要な構えの維持が困難で、反応間は強く contamination を起こしている。自らが与えた反応は体験的に距離の混乱を生じ、結果的に McGhie, A., & Chapman, J (1961) が指摘した焦点づけの確立や維持が出来ない。通常は仮にPP段階でのプロットー反応間の距離に安定性が低くてもINQ段階で検者が介入する事によって適応的な方向に反応が形成されそれが最後まで維持されるのだがVPの場合精神病的な適応を促進する結果に終わっている。またこのような反応の根本には第1反応と考えられる「WS・Mask反応」が背景で支配している可能性

が疑われ、今後の反応継起上に注的な反応となってperseverateする可能性が予想される。

II カード

PP：4秒へ赤い帽子を着た宮沢りえが手を重ね合って二人の宮沢りえが手を重なり合って座っているそれしか見えません

INQ：（教えて）二人の宮沢りえがいて…手の部分足の部分 こうして足も（立ち上がって動作をする）（宮沢りえ）髪の毛のところが結ってあるような…二人の宮沢りえが…骨盤？骨盤（と言うなりD2を指差しながら盛んに声を出して笑う。一通り笑った後で）この形です…大きな骨盤もある骨盤が二つある 重なって…

②WF - FC H Cg P

Add ③DWv F - Atb Sex

距離分析：反応②はP領域にP反応である人間像を認知している。しかしD3領域中に存在する濃淡を中心にした僅かな特徴（髪の毛のところが結ってあるような）からdd-Wな作話的の連想によって、結果的にP領域に「二人の宮沢りえ」を認知する。つまりVPの場合過度の汎化によって極端な認知的な距離の増大を認める。また反応のAtbでは、D2領域を指差しながら「盛んに笑う」という広義のRorschach behaviourが出現する。この領域が一般的に性反応と結びつく領域だけにVPはsexual shockを体験し児童化した喪失の中に自己を位置づけている。反応共に体験的距離が喪失されている。

III カード

PP：7秒へえーっと！黒人風の水着を着た外国人がお尻を振って踊っている 女の人 ハイヒールはいて…それで ここの所が火の玉に見える そしてここが…何かここここが悪魔のように見える 悪魔の目で悪魔の使いものになって 私を見ているような…

INQ：（教えて！）ここが顔で色が黒い 胸で 手でハイヒールがあって…外国人で…丸い頭が似ている スタイルがいいでしょ

（火の玉）火の玉の形に似ている 何かよく考えれば…胎内の幼児の寝返りをうって それが化けて出て来るこれがへその緒でしょ 何かこう私を地獄に引き込もうとしている…恐ろしい赤ちゃん…地獄に…私を…（反応の区別）二つ一緒にいる…私を地獄に…

④WM ± FC' H Obj P

⑤DF - M m (Hd) Fire Eye Abst

距離分析：反応④はP領域にP反応を与えているため正常な認知及び体験的距離を示す反応である。この刺激の特徴から見て、また第1反応としてP領域にP反応を与

える事が出来た事から見て、VPの表面の対人的距離が正常に機能することが予測される。反応⑤は「火の玉」と「胎児」（それぞれの認知上の基本概念としては正常範囲の反応）の二つの反応が Buss, A. H., & Lang, P. J (1965) のいう干渉を起こしており認知的障害の状態にある。加えて「私を地獄に引き込もうとしている…恐ろしい赤ちゃん…」の表現に見られるように体験的距離の喪失は強い。従って、VPの表面的対人距離に関しては一見正常であっても、潜在的な注察感・被害感を伴った病理性が存在し、それが時間経過と共に表面化する可能性を否定出来ない。

IVカード

PP：4秒へこれは悲しそうなぬいぐるみが私を見ている 助けて！助けて！助けて！もう私はどうしようもないと……悲しそうなアライグマが私に助けを求めているような……この大きな熊の顔が見える 熊の両手 熊の足がドン！と立っている

INQ：（ぬいぐるみ）これが目 目がブワーッと私を見ている この全体が目…泣きそうな目…泣きそうな耳…アライグマのほっぺたの…アライグマのぬいぐるみ…家にあるぬいぐるみ 全体的にフサフサしている 目がブワーッと私を……足と手 顔 鼻 胴体すごく ドンと横着というか ドンと（四肢を踏む動作）目…見ている…

⑥WS M - F M cF m (A) Eye

距離分析：反応⑤と同様PP段階で出された「熊のぬいぐるみ」「熊の顔」の二つの反応の干渉が激しく反応単位の弁別が出来ない。特にINQ段階では認知が混乱し「目」の表現に見るように強い注察感から体験的距離を完全に喪失している。またこのような認知の由来は刺激の持つ黒色と濃淡に対するVPの過度な心的投入と関連し、二つの反応の Gestalt の組み替えが出来ず統覚不良が著しい。これは Rickers - Ovsiankina (1938) のいう異常な領域選択の保続を意味している。

Vカード

PP：3秒へこれは何万年も前の昔の蝶が飛んでいるような絵です そしてこれが悪魔の顔のように見えます 悪魔の顔と何万年前のちょうちょが合体して私を見えます お前は苦しんで地獄に行け！地獄に行っても幸せになるな！なるな！と言っています 何か私が殺した〇〇〇〇に似ています

INQ：この部分に目がある おばあちゃんの目 アイヌの目に見えます これがちょうちょの羽に見えて 尾のように ちょうちょとおばあちゃんの目がパーツと合体して（手と手を合わせる動作）それがズサーンと私を

落としている

⑦Wdd FM - m (A) Eye P

距離分析：反応の最初の知覚である「何万年も前の昔の蝶が飛んでいるような絵」に関してはP領域及びP内容として表現はやや妄想的だが一応正常に近似した反応である。しかしながら、「悪魔の顔」と「蝶」が「合体」し、更にINQ段階では「目」が強迫的に認知の中心になり認知的基礎概念そのものが崩壊する。その結果重大な体験的距離の喪失が見られる。おそらくVPがこの刺激に見ているものは「目」のみと考えられる。またこの刺激図版は全10枚の刺激の中で最も単純構造を持つ inkblot であるだけにVPの障害の深刻さを予測出来る。特に反応継起上はカードI・IVに示された被害感・注察感が強く保続され、またこの様な保続反応が単色であると同時に構造的には単純な閉合図形で出現し、中でも構造的に最も単純な刺激に対して最大の病理性が強い反応を与えたことはVPの病理の根深さとしての分裂的な欠陥が深刻である事を物語っている。

VIカード

PP：4秒へこれは狐の皮を開いているような絵です ここが目があって 口があってここからまたお前は苦しみ！苦しみ！苦しみ！と言っているようです。

INQ：狐の鼻 鼻髭 毛皮がある 皮だけを取って広げているそういう全体（手を広げる動作）毛皮…全体に（手を広げる動作）目とか…目 口 悪魔の目が…目の下のところ ボアーボアー（手で濃淡部分をなでる動作）

⑧WM - m c Aobj Eye P

距離分析：Vカード同様反応の認知的基礎概念は正常である。しかしながら、「お前は苦しみ、…」「悪魔の目」など異常なMaskへの保続があり注察感のつよさが認められ、認知的基礎概念を体験的距離の喪失によって破壊しかねない。他の刺激でも認められるが、反応継起上ここでのVPの反応はPP→INQと時間・空間的に位相が変化（移調）することが認知のずれに大きく関連している。仮にVPに何等かの心理的アプローチを試みるとしたならば粹付けによる方法の選択が想定されるし、所謂言語による精神療法の適用は現時点では回避が望ましい。

VIIカード

PP：5秒へこれはポニーテールの女の子が鏡に向かって踊っている ウエストが結構細い女の子 それで何か私を馬鹿にしている様な踊り方をしている（V）でこれもディスコダンスを激しい踊りで 髪の毛が舞い上がっている ここがヒップで ここがウエストで ここが背

中で…

INQ：(女の子)ポニーテールの髪型 横顔 踊りながら「フン！」(顎を上上げる動作)と私を馬鹿にしている

(ディスコ・ダンス)髪 ヒップ 髪の毛で踊っている
腰つき 激しい…そう…ディスコ

⑨ W M \mp m H P

⑩ W M \mp m H

距離分析：反応⑨⑩とも認知的基礎概念上の問題はない。また共に体験的距離喪失が保続していて Gestalt の組み替えも不十分だがこの刺激の特徴(IV・V・VIと異なり単色開合図形)から反応の混交性は防止され、反応単位も明確になっており、VI図版での仮説を裏付ける事が出来る。Rorschach 距離分析では反応間・PP→INQの段階間等のVPの Gestalt の組み替えも距離分析サインとして考える必要がある。

VIIカード

PP：3秒ハこれはセミの頭 昔セミが私の目をジッと見ている 顔に見えて…赤の部分がセミの目で セミの口で 緑と赤の部分がセミの頭の様…で ここが豹に…ここが女の人の骨盤 後は見えません

INQ：(セミ)昔よくセミ取りに行った その目に似ている セミはここ(指でなぞる)

(豹)ここ 形が似ている

(女の人の骨盤)私…前に…マンガ本に…ホラーコミックス…その題名…骨盤の中に女の人が寝ている…寝ているの女の人が骨盤の中に…

⑪ Wv M - Ad Eye

⑫ D F \pm A P

⑬ D F - Atb Sex

距離分析：反応⑪⑫⑬の3つの中で認知的基礎概念として正常なのはである。また、この反応の体験的距離も正常な距離にある。一方反応⑪の場合認知的基礎概念上の問題として軽度の距離の喪失があると共に、その体験的距離は喪失している。更に反応⑬においては認知的基礎概念としてはかなり強い autistic thinking に基づいた認知的距離の喪失と他方における体験的距離の増大を認める

Xカード

PP：5秒ハア これは花火に見えます 水色の部分が舞い散っているような…これが顔 これが目 鼻 口 髭で……これがイギリスの帽子 悪魔の目 悪魔の顔…ハ

INQ：(花火)花火ですよ 水色のきれいな パンと

広がってきれいな花火 きれいな いろんな色

(人の顔)そう人の顔 何か王様 王様が私を怒っている こう何をしても何も出来ないし…うまく出来ないから…怒っている王様で悪魔の顔…私の本当の心を見過ぎしている

⑭ Wv mF CF Expl Fire

⑮ SD F - M m (Hd) Eye

距離分析：反応⑭は Schachtel, H (1969) のいうこの刺激の持つ「分散」的特徴を「花火」という「まとまり」をつけ心理的距離として安定して反応している。また反応⑮に関してはS領域を認知的に「地」としていわゆる good Gestalt を構成した反応であり、認知的基礎概念上の問題はないが、体験的距離の喪失は深刻で特にこれまでの刺激の変化に関係なく、つまり Gestalt の組み替えが出来ない事による保続が強く認められる。

inkblot 反応と距離

例えば、人が空に浮かぶ雲に何かに見たとする。そしてそれを隣に佇む人に説明する場面を思い浮かべてみましょう。本来雲でしかないものに何らかの意味付けを行うことは認知的には適度の距離の増大が必要である。また、仮にその反応を人に説明するとした場合、適度に体験を膨らまして見える理由をあれこれと説明することになる。つまり説明する人間の体験的距離は増大していくことになる。そこでその説明を受けている隣にたたずむ人も同じ体験を味わって互いが納得する。Rorschach method もこれとかなり類似しているが、違うのは構造化された場面であり、説明を受ける人間はこの技法を熟知する専門家である。従って、片口(1987)は「正常な受験者は Rorschach 刺激に対してある種のゆとりと遊びを感じさせる態度で反応する。従って正常者の場合は、認知的距離は増大するが、体験的距離も増大の方向にある。また、体験的距離に関する限り縮小・喪失の方向に問題があり、増大はむしろ適応性や柔軟性を示す」(pp.274)としている。更に彼は「認知的(プロットー反応間)距離の極端な増大と喪失は、共に逸脱的であり分裂病的とも言えるが、この際、体験的距離の喪失はその病的可能性をいっそう強め、増大はその可能性を弱める。認知的距離は、増大・喪失いずれの方向にせよ、その極限においては、分裂病心性の逆説的性質(現実からの乖離と密着)を反映している。これに対し、体験的距離の場合には、喪失は幼兒的・原始的・退行的な人格特性を反映するが、増大はむしろ、

抑制的・強迫的・自己不確実的のそれを反映するであろう」(pp.275)と距離の基本概念に関して言及している。いずれにしろ、適切な距離は極端な喪失と増大の中間に位置するわけであるが、例示したVPの反応はその認知的基礎概念は正常であってもその思考過程は病的に確信的でありその根本として注察感、被害関係念慮や対人的過敏の保続傾向が顕著であって、inkblotの性質に見合った、つまり仮想生活場面の状況変化に対応した「Gestaltの自然な組み替え」を行うことが出来ない。従ってRorschach methodが本来持っている「とりあえずの判断」機能が「病的に確信を持った判断」或いは「対人的に自己不確実にして、自己不全な判断」の両極を示す結果となり、Rorschach methodという仮想生活状況は認知や知覚の焦点付け・理由付け・概念形成の3つの過程が自然にして調和が採れた方向で移調していくことによって健全に展開する場面構成がなされている。そこで、個々のRorschach刺激を提示されるPP段階の場合、通常VPは図と地の選択的能力が安定して機能するためには、認知的な距離はやや増大しているものの、刺激の特徴との関係で安定した基礎概念を保った反応を与え続ける事が出来る。他方INQ段階になるとVPは選択した知覚内容に対する理由付けと概念形成が適切になるように刺激の特徴と彼の体験を適度に結合させていくため、結果として適切な体験的距離の維持が可能である。しかし、病理性が強い場合、個々の反応誘発刺激に対するVPの反応はCameron, N (1939)やShakow, D (1950)のいう「過度の包括」または「過度の萎縮」としての一定の安定した主要な構えの維持困難が認められる。これはPayne, R. W., Mattusek, P., & George, E. L (1959)が知覚におけるフィルター機能不全に相当し、Wekowicz, T. E., & Blewett, D. B (1959)がいう拡大しすぎ・散乱した注意の状態に陥ると考えられる。つまり、その場合VPの図と地の定位が不安定で結果的に認知的焦点付けと焦点保持の双方が失敗することを意味する。VPのこのあり方は現実を検討する能力と現実に関して適切な感覚を保持する能力の2つの機能が問題になる訳であって、仮想生活状況という制約はあるもののVPのその時の対人的現実や状況処理能力を代表しているという事になる。そしてこのような判断の根拠となる鍵はRorschach methodの対人的圧力(VPの場面的距離)の中で、inkblot反応の基礎概念と認知との関係(認知的距離)・認知した反応と体験との関係(体験的距離)を如何にco-ordinateしていくかにかかっている。認知的距離・体験的距離というの

は心理的距離としての間合いの課題である。Rorschach methodにおける認知的間合いと体験的間合いが均衡を保つ度合いは藤岡(1957)のL-C combinationのP-O軸とINQ段階での決定因評価軸及び形態水準評定軸の交差空間上に集約した形で表現されるし、また、何と言ってもVPと検者が測定していると思う世界がずれている事、つまり測定次元が異なっていることによる。最後に今回例として取り上げたVPのP領域への反応の場合カードⅢ・Ⅷの反応には問題がないため、表面的対人関係や自己像の一部には正常な部分もあるが、カードⅡ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・ⅧのP反応は強く障害され、特に最も統覚が容易なカードⅤは強迫的なEye反応という過度に萎縮した収斂的な認知上の問題が結果的に均衡の採れた認知反応であるP反応を破壊し体験的にも完全に距離を喪失し、高江洲(1975)のいう間合いの障害が顕著であり、このVPの分裂病の診断を裏付けることが出来る。また、距離診断的に見た場合VPのRorschach刺激に対する心理的距離のとり方は稚拙である。例えばVPの距離のとり方を通常の対人場面に置き換えるならば親和的でない人に重大な秘密を打ち明けると思えば、親和的な人に急に距離をとるという事に相当する様な恒常的な距離の維持が不可能になっている。距離の変化はVPの動揺を誘う。またこの状態での個人精神療法の専念は治療者自身が距離の失敗を起こす可能性もある。そこで治療的手だてとしては三項関係を中心とした枠づけ法の利用が想定される。

尚、今回触れることはしなかったが、Rorschach methodにおける距離分析として重要なものに刺激に実在する要素と不在する要素との関係を軸にした分析が検討されなくてはならない。その場合、本来Rorschach刺激図版の反応そのものが「とりあえず」であって「疑似」且つ「仮想」ということから成立するのであるならば、実在という観点ではなく不在つまり欠如からの距離分析が必要ではないかと筆者は考えている。この点に関しては今後の課題として取り組みたいと思っている。

参考文献

- 秋谷たつ子・柳 朋子訳(1984) サムエル・J・ベック
ロールシャッハ・テスト-古典文学の人物像診断
みすず書房
熱田一信(1986) ロールシャッハ・テスト 詫摩武俊
監修 パッケージ「性格の心理」 6, 性格の理解
と把握 pp89-100 ブレーン出版

- 馬場禮子 (1997) 治療者の退行—その意義と特質について 心理療法と心理検査 pp198—209 日本評論社
- Buss, A. H., & Lang, P. J. (1965) Psychological deficit in schizophrenia : I. Affect, reinforcement, and concept attainment. *J. abnorm. Psychol.*, 70 : 2—24.
- Cameron, N. (1939) Deterioration and regression in schizophrenic thinking. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 34 : 265—270.
- Exner, J. E. (1986) The Rorschach : A comprehensive system No.1. Basic foundations : New York, John Wiley & Sons. ジョン・E・エクサー 高橋・高橋・田中監訳 (1991) 現代ロールシャッハ・テスト体系 (上) 金剛出版
- Frank, L. K. (1939) Projective methods for the study of personality. *J. Psychol.*, 8, 389—413.
- 藤岡喜愛 (1957) ローラシャッハ反応の数学的分布によるグループ比較のこころみ 心理学評論 1, No.1, 35—49.
- 片口安史 (1956) 心理診断法詳説—ローラシャッハ・テスト 牧書店
- 片口安史 (1956) 問題の提起 シンポジウム : ローラシャッハ・テストに理論は必要か ローラシャッハ研究 12, 128—130.
- 片口安史 (1977) 新・心理診断法 金子書房
- 片口安史 (1987) 改訂 新・心理診断法 金子書房
- McGhie, A., & Chapman, J. (1961) Disorders of attention and perception in early schizophrenia. *Brit. J. med. Psychol.*, 34:103—116.
- 岡田強 (1930) ローラシャッハ氏の所謂「精神診断学」の実験的考察 第1回報告 神経学雑誌 32. No. 5, 43—55.
- Payne, R. W., Mattusek, P., & George, E. I. (1959) An experimental study of schizophrenic thought disorder. *J. ment. Sci.*, 105:627—652.
- Piotrowski, Z. A. (1957) Perceptanalysis : A fundamentally reworked, expanded and systematized Rorschach method New York : Macmillan
- 上芝功博 (1980) ピオトロスキー, Z. A. 知覚分析—ローラシャッハ法の体系的展開 新曜社
- Rapaport, D. (1946) Diagnostic Psychological Testing. II. Chicago : The Year Book.
- Rickers - Ovsiankina, M. A. (1938) The Rorschach test as applied to normal and schizophrenic subjects., *Brit. J. med. psychol.*, 17 : 227 —257.
- Rorschach, H. (1921) Psychodiagnostik : Methodik und Ergebnisse eines Wahrnehmungsdiagnostischen Experiments. Bern : Ernst Bircher.
- 東京ローラシャッハ研究会訳 (1964) ローラシャッハ, H. 精神診断学—知覚診断の実験の方法と結果 牧書店
- Schachtel, E. G. (1966) Experimental foundations of Rorschach's test. New York : Grune & Stratton. 空井健三・上芝功博共訳 (1975) シャハテル E, G. ローラシャッハ・テストの体験的基礎 みすず書房
- Shakow, D. (1962) Segmental set : a theory of the formal psychological deficit in schizophrenia. *Arch. gen. Psychiat.*, 6 :1—17.
- 高江洲義英 (1975) 慢性分裂病者の人物画と「間合い」芸術療法 6
- 内田勇三郎・山根薫 他 (1930) 素質の実験類型心理学的研究 教心研 No. 5, (1)323—345, (2)385—417.
- Weckowicz, T. E., & Blett, D. B. (1959) Size constancy and abstract thinking in schizophrenia. *J. ment. Sci.*, 105 : 909—934.

(1998. 11. 11受理)